Kappa Novels

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　科学捜査官　¥390

昭和48年5月25日　初版発行

著者　島田一男（しまだかずお）
東京都新宿区余丁町4

発行者　五十嵐勝彌

印刷者　堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替東京115347　株式会社光文社　電話東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（榎本製本）
表紙の模様・意匠登録　116613

© Kazuo Simada 1973

(分)0-2-93(製)02231(出)2271 (0)

Kappa Novels

Kappa Novels

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　科学捜査官　¥390

昭和48年5月25日　初版発行

著者　島田一男（しまだかずお）
東京都新宿区余丁町4

発行者　五十嵐勝彌

印刷者　堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2　振替東京115347　株式会社光文社　電話東京（942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　（榎本製本）
表紙の模様・意匠登録　116613

© Kazuo Simada 1973

(分)0-2-93(製)02231(出)2271 (0)

第一章　七ツ塚の〝女〟

1

十一月六日、月曜日……。
三日は文化の日で、五日は日曜日。つまり飛び石連休である。
そして、疲れはてた十んだい？
彼も、彼女も、霜枯れ日さ。
遊び過ぎ……。体調のんだい？
そして、疲れはてた十んて勲章は、このところやたら彼も、彼女も、霜枯れ化勲章だけは、めったなことで遊び過ぎ……。体調の巷の風が身にしみるのは口の八〇パーセントを占める給からだけではない……。勲章などはどうでもよかった。
書類を眺める目がうつ月三日は祝日だということと、くびを噛み殺している。して公休か代休にするかということである。
三日続きの休み！　素晴らしい！　二日の夕方からマイカーで飛び出して、六日の朝までに帰ってくる。四泊五日！　もう一度、素晴らしい！
東名・名神の渋滞？　知っちゃあいない、知っちゃあいない……。
そして、疲れはてた十一月六日、月曜日……。
彼も、彼女も、霜枯れた並木そのままの侘しい表情。
遊び過ぎ……。体調の混乱……。ふところも淋しい。巷の風が身にしみるのは、一カ月後に師走が迫っているからだけではない……。
書類を眺める目がうつろだ。タイプを打ちながら生あくびを噛み殺している。電話の応対も不機嫌だ。
こんなときに、――午前中は仕事をしなくてもよろしい。ふだんの調子を取り戻すためのトレーニングを行なえ……なんて命令を出す部課長がいたら、将来は重役疑いなしなのだが……。まず、いないだろう。
九段坂上、千鳥ガ淵に近い白い四階建てのビル。中央に塔があって、その上に一年じゅう日の丸の旗が翻っている。――警察庁科学捜査研究所……。略して科捜研

という。
もちろん科捜研はお役所だ。所はは世界的は世液学者漆原博士。その下に、総務・特別捜査・防犯査・・交通犯罪の四部があり、八十二人の研究員と二十員との事務系警察官が勤務している。
だが、ここの空気は、連休あけでも、他の官庁や会社とはだいぶ違っていた。それというのも、所員の大部分が、犯罪科学を研究する学者や、その助手だったからであろう。——とかく学者は、気むずかしくって、わがまま者が多い……。
「——どうじゃったね、連休は？」
職員食堂の窓ぎわの席。テーブルを挟んで腰を降ろすと、復顔班の浜松技官が、特別捜査部次長の円城寺警部にたずねた。
「親父のところで、見合いをしてきましたよ」
特捜部の中には、幾つかの班がある。——法医班、物理班、化学班、銃砲班、心理班、文書班。復顔班もその一つである。したがって、特捜部次長の円城寺は、復顔班の浜松技官にとって上役にあたるわけなのだが、円城寺の浜松に対する言葉は丁寧だった。
円城寺は、田舎巡査の家に生まれた。父親は山の部落の駐在さんだが、息子は大学で東洋哲学を専攻し、卒業と同時に警視庁入りをして、十年あまりで警部になり、いまでは警察庁に回って科捜研特捜部次長である。
浜松技官は、同じ大学の先輩。といっても法医学の専攻で、現在は警察庁の技官であると同時に母校の非常勤講師現兼ねている。
「町田じゃったね、お父さんが勤めているのは？」
「ええ。かつての南多摩郡町田町……。これがいまでは東京のベッドタウンとして膨れ上がり、人口二十万の町田市……。もっとも、親父が勤務しているのは、町の中心部から一五キロも離れた鶴岡という部落ですがね」
「知っとるよ。有名な鶴岡遺跡のあるところじゃろう」
「その遺跡を目の前に眺めるあばら家が、ぼくの生家です」
「で、どうじゃった？」
「え？」
「見合いじゃよ」
「ええ……」
円城寺が、ちょっと返事を渋ったとき、心理班の技官牧村香那子が、セルフサービスのコーヒー三つを盆に載せて近づいてきた。

「次長はブラック、浜松さんはクリープでしたわね」
香那子は医学博士の肩書きを持っている。『食物に対するドブネズミの条件反射的生態』と題する論文がパスして博士になったのだ。科捜研では嘘発見器を担当している。
「なんのお話？」
「連休……」
円城寺がコーヒーをすすりながら答えた。
「あたし、お部屋の色を塗り変えたの、自分で」
「君はマンション住まいだろう？」
「そう、ちっぽけな……。居間をまっ赤に塗ったの。寝室は黄色。ダイニング・キッチンは青」
「三原色じゃねェ！」
浜松が呆れたように言った。
「そう、そこでペルシャ猫を一匹飼いました。三つの部屋に対する猫の反応を実験するために……。猫がどこを好むか、わかる？」
「ふーむ……。こら、難問じゃねェ」
「どう、次長さんは？」
円城寺も首を傾げた。
「黄色かな……。まっ黄色なバなクに、純白猫がどこを猫……。これは絵になる」
「残念でした。青よ」
「意外だなァ」
「だって、青いダイニング・キッチンには食べ物がある
もの」
円城寺と浜松は思わず顔を見合わせた。——やられた……という表情である。
「浜松さんの連休は、うつらうつらと日なたぼっこでしょう」
「とんでもない」
浜松が言下に香那子の言葉を打ち消す。
「わしゃ、京都へ行ったよ」
「まあ、本願寺さんへでもお参りに？」
「寺へは行かんが、墓を掘ってきたよ」
「浜松さんのお国は京都でしたかしら？」
「甲州鰍沢……。ただし三代前から東京住まいだ」
「でしょう。じゃ、誰のお墓を？」
「かの有名な〝五月の前〟……」
香那子が円城寺の顔を見た。
「五月の前〟って誰？」
円城寺が、ちょっと肩をすくめる。が、その顔には、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

――もう騙されないぞ……と、薄笑いが浮かんでいる。
浜松が、とっ拍子もない声で笑った。
「次長は、〝猫と三原色〟のことを考えとるようじゃが、わしが京都へ行ったのは事実。〝五月の前〟なる女性の墓を掘ったのも本当なのじゃよ」
「聞いたことのない名前ですねェ」
「わしも初めて聞いた」
「じゃ、身元不明？」
「何もわからん。わかったことは、およそ八百年前……つまり平安朝末期じゃね。そのころ、都に鳴り響いた絶世の美人白拍子であったということだけ。それも言い伝えじゃがね」
「その墓を掘ったんですか？」
近くに、五月塚という小さな塚くをバイパスが通ることになっ
[illegible]か転がり出た？」
「先走りなさんな。工事のときに、塚が崩れるかもしれん。そこで京都の考古学者が先に塚をあばいてみることになった。幸い、わしの知っとる助教授が調査団の中心に混じっとってね、ヒマなら来てみんかとお座敷がかかったので、わしゃすっ飛んで行った」
「頭蓋骨ですか？」
浜松が三、四度、こまかくうなずいた。
――復顔法。カービング法ともいわれるが、ひと口にいえば髑髏の肉づけである。
桜田門外にある人事院ビル三階の一隅に警察庁刑事局鑑識課の看板がかかっている。ここに、〝身元不明死体票〟を整理したカード箱がある。整理されているのは、昭和四十年以後のものであるが、カードの数は二万枚を越えている。
これが、この数年間に、全国の警察から警察庁へ報告されてきた身元不明死体の〝戸籍台帳〟なのだ。
この二万余人の半数以上が、顔形のわからぬものか、白骨死体だという。
――もし、生前の顔がわかれば、この中の何百人、あるいは何千人かは身元がわかるかもしれない……。
――身元がわかれば、病死か、自殺か、または他殺か、その死因を追求することも不可能ではない……。
ここに、復顔法の重要性が生まれてくる。
「――わしゃ、ひとりでも多くの仏さんを成仏させてやりたいのじゃよ……」

そういって、髑髏の肉づけに異常な情熱を傾けているのが浜松技官なのだ。
しかし、その浜松にとっても連休はレジャータイム。スキーに行こうが、温泉でふやけようが、昼寝をして過ごそうが、かまわないわけなのだが、彼は京都へ墓掘りに行ってきたという。
「わしゃね、夢を一つ持っとるのじゃよ。よくいうじゃろ、――小野小町か照手姫か……とね。つまり、日本の美人の代表は小野小町か照手姫ということになっとる。この肉づけをやってみたいのじゃよ」
「そりゃあ面白いわねェ。あたしだって、小野小町や照手姫の顔を見てみたい」
香那子は、すっかり浜松の話にのっている。
「そこが問題なんじゃ。復顔してみたら、あけてビックリ玉手箱、――なーんだ、こんな顔か……ということになるかもしれん」
「あら、どうして？」
「平安朝時代の絵巻物を見てみなさい。紫式部にしても清少納言にしても、みんなオカメ面じゃ」
「うん。そういえばみんな下っぷくれね」
「つまり、小野小町も照手姫も、いわゆる現代の美人とは、およそほど遠いものかもしれん。にもかかわらず、美人といえば依然として小野小町か照手姫かじゃ」
「愉快ねェ！　どこにあるの、小野小町や照手姫の頭蓋骨は？」
「わからんよ」
「本当？」
「小町の墓、照手の墓と称するものは、大げさにいえば日本じゅうに散らばっとる。どれが本当の墓やら、はたして実在の人物やら――」
「なーんだ！」
「だから、わしは平安末期の美女五月の前の顔を復元してみようと考え、その頭蓋骨を借りてきたのじゃ」
円城寺が驚いて顔をあげた。
「ここに？　この科捜研の中に、五月の前の頭蓋骨が？」
「わしの机の上に置いてあるよ。小町ではないが、それでも平安朝美人の顔がわかるじゃろうと思うてね、無理に借りてきたのじゃよ」
「それはニュースだ！」
「ニュースはお前さんのほうじゃよ」
「次長に？　何があったの？」
香那子がたずねた。

「このひと、見合いをしたそうじゃよ」
「まあ！」
香那子が円城寺のほうへ向き直った。
「本当？」
「ああ……」
「古いわ！　お見合いだなんて」
「ぼくの意志じゃないよ。――たまには帰って来い、警部の息子は、ヒラ巡査の親父なんかおかしくて顔を見せられないのか……って、親父から電話がかかってきたんだ。だから、今度の連休に帰るって返事をした」
「町田だったわね？」
「そう……」
「で、帰ってみると、お見合いの相手が来たのね？」
「いや、もう、来ていた」
「計画的ね」
「まあね……」
「どんなひと？」
「つまり、平安朝的美人ではなかったな」
「ということは、現代的美人ね？」
「だろうなァ」
「幾つ、年齢は？」
「三十……といってた」
「あたしと、おない年ね」
「ただし、再婚なんだ。二年前に、亭主と死に別れて、実家へ返されたといっていた」
「再婚どうしというわけね？」
円城寺がうなずいた。
「だが、ぼくは協議離婚だ。おかげで、離婚成立と同時に、こんなところへ回されてしまった」
円城寺の妻律子は、法務省の幹部で移民庁次長、高林省吾の姪だった。律子の実家、高林省吾の兄である高林和吉は高和商事という貿易会社を経営し、律子の兄の京市郎は専務として会社を切り回している。
金持ちのひとり娘で、金のありがたさを知らない律子と、田舎巡査の息子で、奨学金とアルバイトで大学を出た円城寺。
叔父の高林省吾が、円城寺の将来を見込んでの結婚ではあったが、その家庭生活はうまくいくはずはなかった。
当時、円城寺は警部補で、警視庁の通信指令室長をしていたが、給料は手取り十万足らず。――律子は、三日に一度、銀座の一流美容院へ出かけて行く。
――前からの習慣だから、しようがないでしょ……と

律子はいうが、これでは、円城寺の給料は律子の化粧代にも不足だった。
デパートの特選会には必ず出かけて、気に入ったものを買ってくる。クラスメートとのパーティは一流ホテル。休日には脱日本でハワイへ、香港(ホンコン)へ、グアムへ……。
「――あたしが実家から貰うお小遣いでしていること、あなたには迷惑をかけていません」
律子はそういったが、円城寺には我慢できなかった。離婚を決意した。
「君は、自分の将来を考えたことがあるのかね？」
移民庁の次長室だった。
同じ次長でも、科捜研特捜部などの次長と、移民庁の次長では格が違う。
移民庁は、日本へ出入りする外国人の管理と、国内に居住する外国人の監督を一手に握っている。移民庁長官は大臣クラスであり、次長は各省の次官、または局長級だった。
ただ、その担当事務の性質上、長官は外務省から、次長は法務省からという変則な形をとっている。
その次長の高林省吾が、円城寺から律子と別れたいという言葉を聞くと、呆れたように、――将来を考えたことがあるか……といったのだ。
「――わしはね、警視総監に頼んで、都内四万四千人の警察官の中から、君を選び出してもらったのだよ。早くいえば、わしは君に賭(か)けたのだ。――二十年後に、君が総監室の主人(あるじ)に納まるかどうか……にね」
「わたしが、警視総監に!?」
「何を驚くのかね。いまの総監だって、四国の小百姓の倅(せがれ)ではないか。問題は、頭脳とコネと金力だ。君は頭がいい。そして律子を妻にしている限り、金は高和商事から出る。内部的には、わしと、わしの息のかかった法務官僚がバックアップする。――それでも君は、律子と別れるというのかね？」
「ええ……」
「馬鹿な男だ！　女の一人や二人、人形が転がっていると思えばいいじゃないかッ」
「わたしはその人形に、我慢ができないのです」
結局、円城寺は五年前に律子と別れた。とたんに警視庁から警察庁へ回され、科捜研の総務部勤務が発令された。
「――惜しいね。君は若い。第一線でバリバリやれるひとなのにな？……」

円城寺が所長室へ着任の挨拶に行くと、漆原博士が気の毒そうにいった。
「わたしはここも第一線と考えています。どうかよろしくお願いします」
「む？　話せるねェ、君は」
漆原所長が満足そうにうなずいた。
「ひと言だけいうておくつもりだったんだよ、警視庁の捜査課などが華々しく日の当たる場所であり、この科学捜査研究所は気違いじみた学者どものお守りをする日陰の場所……と思うていると、ここでは一日もつとまらない……とね。が、その必要はなかったらしいね」
それから五年の時が流れた。
円城寺は、漆原所長はじめ変わり種の多い学者たちから親しまれた。まったく、ここは普通の世界ではない。
年じゅう、白骨の頭を撫でてにやにやしている浜松技官。
毛髪――特に陰毛のちぢれ具合や、色彩や、すり切れ方を、二十年間も顕微鏡でのぞき続けている徳丸技官。
こと商標と名のつくものを見れば、すぐ赤外線テレビジョン・カメラにかけて真偽を確かめねば気がすまない古河技官。
紅一点の牧村香那子だって、その白衣のポケットには、性格検査に必要なテスト・カードを入れていて、誰彼なしに、お化けが踊っているようなカードの影絵を見せ、――これ、何に見える……と質問する。
このほか、拳銃のことしか知らぬもの、血液以外には興味を示さないもの、眼球の動きだけをグラフにとるもの、数えれば、八十二人の技官や助手はすべて一風変わり、ひと癖持っている。
しかも、こんな研究や調査が、日本全国で発生する凶悪犯罪や知能犯罪を解決する大きな手がかりになっている。
もともと東洋哲学などを専攻した円城寺だ。いつか警視庁へ戻ることなどは忘れ、この変わった世界がすっかり気に入ってしまった。
そして、なんとなく受けた警部試験にも合格し、いまでは特捜部の次長になっている……。
「で、どうなのよ？」
「え？」
「お見合いよ」
香那子が、じれったそうにいった。
「ああ、断わってきた」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com